

熊毛地区社会教育委員だより

令和7年2月発行
熊毛地区社会教育
委員連絡協議会

郷土芸能の継承と交流

熊毛地区社会教育委員連絡協議会
中種子町自治公民館連絡協議会
会長 笹川 正

全国津々浦々、どこにでも郷土芸能が存在しますが、活動が縮小している地域も多くあります。私が住んでいる平鍋集落も、少子高齢化により、青年から壮年、足の痛い高齢者まで、すべての人を集めなければ踊りとして成り立たない状況です。このまま継承活動を行わないと指導者がいなくなるため、このたび、一念発起し、郷土芸能の復活に取り組みました。昨年度に踊った「ヤートセー」は実に38年ぶり。今年度は14年ぶりに「大踊り（新吾おどり・こんじょの稚児）」が復活。今回、紆余曲折あった郷土芸能の継承活動について、書きたいと思います。

最初の難関は、年度初めの集落総会でした。このとき、指導者（集落の隠居の方々）から、今のうちに継承してほしいとの打診がありました。前回の披露が1985年であるため、記録（映像）がなく、復活は難しいという声もあり、さらには、人はいても踊ってくれる人がいないという状況です。昔は半ば強制だったかもしれませんが、今は令和の時代。集落長は度々文句を言われながらも、頭を下げ、何度もお願いして参加者を集めました。しかし、練習を始めたものの、指導者もうろ覚え。38年前に踊った踊り子から、「踊りが違う」「歌がずれている」との指摘があり、参加者一同、四苦八苦の日々。記憶をたどり、頭を悩ませながら、本来の踊り（だっただろう）は何とか完成に至りました。熾烈を極めた活動の結果、郷土芸能の灯を絶やさずことなく、未来へとつなぐことができました。

郷土芸能には、五穀豊穡や無病息災などの儀式的役割と娯楽の意味があります。今回の活動を通して、世代を超えた交流が生まれ、地域全体の結束力の強まりを実感できました。今後、高齢者や子供の見守り強化、ひいては集落コミュニティの強化につながっていくことを期待します。人と人とのつながりが希薄な今だからこそ、みんなで、地域を盛り上げよう！



【大踊りの様子】

PTAで成長のチャンスをももらった

中種子町PTA連絡協議会
会長 山浦 拓己

昨今、ネット記事では「PTA不要論」が散見されるようになっていきます。記事内容によると、①強制加入の問題、②役員選出の問題、③活動に対する経済的・時間的負担等が挙げられており、なるほどと思う部分があります。①について、単位PTAや町P連でも意見交換したこともありますが、「種子島ではこの問題はまだ表面化しておらず、あまり掘り下げるとPTA組織の根幹を揺るがすことになるのでは」などの懸念もあることから棚上げしているのが現状です。

今回は、②③について少し自分の考えを述べます。私はこれまで小学校・中学校・高等学校のPTA会長・副会長と町P連会長、県P連副会長と役員をやってきて、そのどれも「やってよかった」と思っています。

役員を引き受けると、関連する会議に出席して発言する機会が増えます。中には分からないテーマの時もあり、そういう時は質問をして理解を深めます。また、自身で問題提起を行う時もあり、事前に調査や学習を行った上で資料をまとめます。また、人前で挨拶をすること、多方面との交渉を行うこともあります。最初は戸惑い、次に拙いながらもやってみる、それが経験となり、もっとうまくできるようになっていくことが私は嬉しい。

PTAはよく「子供のため」と言われますが、半分は「自分のため」だと思っています。子育てや教育に関して保護者もスキルアップしていかなくてはなりません。役員が回ってきたら自分の成長のために頑張ってみてはいかがでしょうか。

役員に限らないことですが、PTA活動は「やらされている」と思うと急につまらないものになってきます。自発的に「やっている」というボランティアの精神と、少しだけ「楽しむ」余裕を自分のためにもってほしいと思います。

子供は親の背中を見て育つと言います。楽しそうにPTA活動に取り組む姿と、しぶしぶ取り組む姿、どちらが子供の社会性に寄与するかは明らかではないでしょうか。



子ども会育成会の大切な役割

屋久島町子ども会育成連絡協議会
副会長 矢野 憲一

【危険なことも教える】

「危ないからやめなさい・・・」と、危険から子供たちを遠ざける指導が必ずしも正しい指導とは言えません。日常の生活環境、自然環境の中で様々な体験や学習を行いながら危険を察知し、自分の身を守る力を身に付けてやることも私たち子ども会育成会の大切な役割です。また、子ども会ではKYT（危険予知トレーニング）という、子供たちが自分の力で危険を発見し、回避する方法を考えるトレーニングカリキュラムも行っています。

子ども会活動は、まさに「生きる力を身に付ける活動」ということができるでしょう。

【自主性・主体性を育む】

一から十まで大人が準備して子供たちはそれに参加するだけ。最近ではそれが当たり前の子ども会活動。しかし、本来子ども会活動とは、子供たちが自分で考え、準備し、活動する。そして、育成者は子供たちの力が届かない部分をサポートする。そういうものではなかったでしょうか？

屋久島町子ども会育成連絡協議会には「主体的に活動するモデル地区子ども会」という、独自の制度があります。これは、子供たちが計画・話し合い・役割決め・準備・当日の運営・後片付けの全てを自分たちの力でを行い、育成者は子供たちの力の届かない部分のサポートと見守りを行うというものです。

毎年、町内の単位子ども会の中から2単位子ども会に「モデル地区子ども会」として活動してもらい、活動後に報告をまとめ、町生涯学習大会等での発表を行い、町内全ての子ども会でその活動を共有しています。

活動内容は問いません。クリスマス会でも、地域のおじいちゃんやおばあちゃんたちとの交流会でも、地区内の清掃活動でも。子供たちのやりたいことで構いません。大切なのは「何をするか」ではなく、「自分たちでできることは自分たちでやってみる」（子供たちにやらせてみる）ということです。自分たちでやろうとする子供たちの力、それを見守る育成者の勇氣、子も育成者も試される活動かもしれません。

これからもこのような活動を通して、子供たちの「危険を察知し、身を守る力」と「自主性・主体性」を育む活動を続けていきたいと思っています。



【地区子ども会ジュニア・リーダー養成研修】

屋久島の自然と地域力を生かしたPTA活動

屋久島町立岳南中学校
校長 永野 由可里

「第31回ふれあい屋久島自転車一周」を9月28日に実施しました。生まれ育った屋久島の自然を体感し、仲間と困難に立ち向かい、絆を深める意義深い行事で、平成2年から続いています。コロナ禍では、距離を短くするなど工夫して実施していましたが、今回は5年ぶりに「屋久島一周」での開催となりました。

3年PTA全員が企画立案や役割分担、事前準備や諸手続等の全てにおいて協力し、安心安全に実施できるよう、一致団結してサポートしてくださいました。子供たちはサイクリング、もしくはサポート隊等、参加方法を選び、3年生全員が参加することができました。教職員5人（校長・教頭を含む。）は子供たちと一緒に屋久島一周（約100km）をサイクリングし、他の教職員は各場所で声援を送るなど、岳南中教職員もみんなで丸となって支えました。心配していた西部林道も安心して通行することができ、岳南中校区に入ると、地域の皆様の声援が大きくなり、地域の温かさを感じました。参加した3年生は、屋久島の雄大な自然を心と体で感じ、一人では難しいことでも、みんなで励まし合い、力を合わせれば達成できるということを身をもって体験できたことと思います。

この行事を通して、それぞれの絆が、今まで以上に強くなりました。この体験は一生忘れることはないでしょう。辛いときや挫折そうなときに励ましてくれる心強い思い出です。このように子供たちの未来につながる素敵なPTA行事が、地域の理解と保護者の協力で、これからも無理なく持続可能であるように、創意工夫していきたいと思っています。

最後に、県PTA活動研究委嘱公開に際し、御指導と御支援を賜りました熊毛教育事務所、屋久島町教育委員会、屋久島町PTA連絡協議会及び全ての関係の方々に心から感謝申し上げます。



【第31回ふれあい屋久島自転車一周】

心豊かな子どもの育成を目指して

西之表市子ども会育成連絡協議会
会長 丸田 健次

西之表市子ども会育成連絡協議会の会長を務めて23年になります。これまでに様々な研修に参加し、たくさんの方々との出会いがありました。この経験が、物事の考え方やこれからやるべきことについて学びを深め、自分自身の成長につながっているものと思っています。

さて、近年、少子化・情報化など、子供たちを取り巻く環境は大きく変化し、コミュニケーション能力の低下や人間関係の希薄化が懸念されています。そのような時代を子供たちがたくましく生き抜くことができるように、必要な資質・能力を育むための環境整備に努めなければならぬと考えます。

私は、これまでの経験から、体験活動が子供たちの心を豊かにし、生活スキルを向上させると思っています。そこで西之表市子ども会育成連絡協議会では、市内の子供や保護者の交流を目的とした、新聞紙凧作り&凧あげ大会を例年実施しています。親子で会話をしたり、周りの人に聞いたりしながら凧を作ります。高く高く舞い上がり、気持ちよさそうに飛んでいる凧をうれしそうに得意げに見つめる姿や、破けた箇所を修繕しながら何度もチャレンジする姿を見ることができます。この活動だけでも協力し合い、励まし合い、助け合う心が養われ、心豊かにたくましく成長していると思います。残念ながら今年度は天候不良により実施することはできませんでしたが、これからも継続して実施していきたいです。

明るい社会作りのためには、子供の存在そのものが「希望」です。子供たちの笑顔がいつまでも絶えることのないように、地域の方々の御協力をいただきながら、「地域の子供は地域で育てる」の考えの下、子供たち一人一人が輝き、活躍できる子ども会活動を目指して取り組んでいきたいと思っています。



【凧あげ大会の様子】

手と手をつなぐ「ふるた結の里」

西之表市社会教育委員
古田地区公民館長
窪田 良二

古田校区は、西之表市の市街地から県道76号線を南東へ約10kmの古田盆地に位置し、海に囲まれた種子島の中で、全く海に面していないものの、自然豊かで、明治期からの移住者を温かく迎え入れた古有民の結の精神を受け継ぐ地区である。平成元年には680人であった人口も令和6年には、350人となり過疎化が加速している。社会教育委員となって早10年、これまでの取組を振り返ってみたい。

15年前の旧古田中学校の閉校、10年前の旧古田保育園の閉園が地域に落とした影響は計り知れず、私の区長としての最大の使命は、この跡地をどう活用し、拠り所としていくかであった。何度となく市役所に出向き、当時の職員と共に活用方法や事業を探していると県の事業である「多世代交流・多機能型支援の拠点づくり事業」にたどり着いた。2年半に及ぶ事業の中、拠点となる旧古田中学校跡地を「結の里」と名付け、地域交流拠点として整備した。保育園跡地には放課後児童クラブが発足し、2階では御前塾が活動を始めた。さらには、7集落の現状を整理して地域支え合いマップとしてまとめ上げた。事業との出会いは、同時に県庁や市役所職員との出会いでもあった。また、数多くの研修や交流を通して、有意義に成長することができ、公民館活動が活発に行われた時期でもあった。

令和に入り、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るった3年間は、まさに地域コミュニティが機能せず、行事やイベントは縮小や中止を余儀なくされた。郷土芸能の奉納ができなかったことが一番つらい出来事であった。しかしながら、こんな時だからこそやれる事があった。地域を見つめ直し、課題解決への糸口を探すための地域ワークショップを開くことができた。令和3年から4年にかけて、地域アンケートから見い出される地域計画を作り上げた。地域コミュニティは、地区民で守っていく。人口減少を感じさせないための交流の仕掛けとして結の里マルシェを始めた。同時に、特産品の開発や商品化など女性の活躍の機会でもある。これからも「結の里」の挑戦は続いていく。



【結の里マルシェの様子】

女性が主体的に輝ける地域社会を目指して

南種子町社会教育委員
南種子町地域女性団体連絡協議会会長
岩元 浩美

南種子町地域女性団体連絡協議会は、地域の女性たちが主体的に活動し、地域社会の発展や住民の福祉向上に寄与することを目的として、多岐にわたる取組を行ってきました。

今年度の新たな取組として、自主研修会を実施しました。この研修会では、榕城小学校校長の才川文秋先生（南種子町出身）を講師としてお招きし、「地域と家庭、学校との協働」というテーマで御講話いただきました。才川先生は、教育現場の豊富な経験を元に、心身の健康や人間関係の大切さ、そして地域社会での幸福感を育むための具体的な方策についてお話しくださいました。参加者からは「とても分かりやすく、感銘を受けた」「家庭や地域で実践していきたい内容だった」など大好評を博しました。特に、子供たちに育みたい力と保護者の接し方について、具体的な事例を交えながら語られた内容は、参加者の心に深く響いたようです。研修会後には意見交換会も行われ、参加者同士で積極的な意見が交わされるなど、学びを共有する貴重な機会となりました。

また、今年度はコロナ禍により休止していた合同スポーツ大会を4年ぶりに再開することができました。この大会は、会員同士の親睦と融和を深めるための重要なイベントであり、例年多くの会員が楽しみにしている行事です。昨年度は雨天のためやむなく中止となりましたが、これまでの役員の思いを引き継いでの念願の開催となりました。

当日は晴天に恵まれ、和やかな雰囲気の中で大会が進行しました。競技中には笑顔や笑い声が絶えず、互いに応援し合う場面が多く見られました。また、グラウンドゴルフは年齢や体力を問わず楽しめるスポーツであることから、多くの会員が気軽に参加することができました。「普段なかなか話す機会のない会員とも触れ合うことができた」「運動不足解消になり、とても楽しかった」といった感想が寄せられ、絆を一層深めるよい機会となりました。

今後も、地域のニーズに応じた活動を展開し、女性が主体的に輝ける地域社会の構築に向けて取り組んでまいります。



【自主研修会】

生きた社会教育の場としての公民館活動

南種子町社会教育委員会委員長
南種子町公民館連絡協議会会長
島間地区自治公民館長
船川 継人

島間地区では、社会教育の観点から地域住民の交流と学びの場を提供し、地域の活性化を目指して様々な取組を行っていますので、紹介します。

まず、島間地区の冬の風物詩として親しまれてきた「自然の家イルミネーション」ですが、今年度は新たな試みとして、点灯式を実施しました。この点灯式では、地域住民によるバンド演奏や出店、バザーを取り入れ、多世代が集い楽しめるイベントとして大成功を収めました。ライトアップされたイルミネーションの美しさはもちろんのこと、バンドの演奏や出店により地域のつながりを強める場となりました。

次に、島間小学校の創立150周年を記念する式典を、学校と自治公民館が連携し、準備から当日の運営まで協力し合って開催しました。この式典は、地域と学校が一体となり、過去の歴史を振り返るとともに、未来への希望を共有する重要な機会となりました。特に、地域に伝わる郷土芸能「バック舞」の披露は、多くの参加者に感動を与えました。この舞は地域の伝統を象徴するものであり、若い世代から高齢者まで一緒にその価値を再認識する場となりました。また、地域の有志による歌や特技も披露され、単にイベントを楽しむだけでなく、地域の歴史や文化を学び、次世代へと引き継ぐ「生きた社会教育」の場としての意義を感じることができた式典となりました。住民一人一人が役割をもち、協力し合うことで、地域全体の一体感が更に高まったことを実感しています。

島間地区では、これからも地域の特性を生かし、社会教育を通じて住民が学び合い、支え合う場を提供していきます。今年度の成果を糧に、次年度も更に魅力的な取組を展開していきたいと考えています。皆さまには、引き続き御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。



【自然の家でのイルミネーション】

【編集・発行】

熊毛地区社会教育委員連絡協議会事務局
住所 西之表市西之表7590番地
熊毛教育事務所内
電話 0997-22-0535